

心に壁をつくらないで

富岡西高等学校 一年

にしむら ゆき
西村 祐紀

（敬称略）

日本では令和五年度末に在留外国人の数は三四一万九九人と過去最多を更新しました。そして、私の住んでいる徳島県でも県内在住の外国人者数は令和五年六月末現在で七三四三人と過去最多になりました。平成十九年から増加傾向にありましたが、コロナ禍で一時減少しました。しかし、現在では約九十の国と地域の人が県内に存在しています。約百人に一人が外国人という状態になっているのです。このような現状で外国人支援の重要性はどんどん高まっています。

私は今年の六月、阿南市で開催された「外国人とつながる交流ひろば」というイベントにボランティアとして参加しました。市内に住んでいる外国にルーツのある方がたくさん集う交流会で、私は食品セットを配布したり、様々な国の方と一緒にお話をしたりしました。私にとって初めてのボランティア活動で、知っている人は一人もいなくて、外国人の方とコミュニケーションをしっかりと取ることができるのか最初はとても不安でした。それでもちろん緊張もしました。でも、交流会が始まると不安や緊張は不思議とすぐに消えていきました。それは、その空間に「言語の壁」や「文化の壁」がなく、人も場所も非常に雰囲気良かったからだと思います。交流会には私が想像していた以上に多くの外国人の方が参加しました。思い返してみると、それまでに外国人の方と直接関わったことがあったのは学校の英語の授業だけでした。だから、私の住んでいる阿南市にこれほど多くの外国人がいることに驚きました。このとき、普段関わりが少ないからこそ、実際に外国人と会って話をしてみないと分からないことは多いと感じ、この交流会は外国人との共生について考える良いきっかけになりました。

私はベトナム人の女性とフィリピン人の男性、中国人の女性ボランティアの方やアメリカ人の英語講師の方と交流をしました。特に印象に残っているのがベトナム人の女性四人との会話です。十代後半から二十代前半の若い年齢の方だったため、親近感があり、写真を撮ったり、お菓子を食べたりしながらお互いに会話を楽しんでいました。しかし、私にはその会話の中で一つ気になったことがあります。ベトナム人の女性四人は同じ職場で缶づめを作っていると話してくれました。そして私は何の缶づめを作

っているのかと質問をしました。すると四人は、中身は知らないと答えました。その時、「中身を知らないとはどういうことだ」と疑問に思いました。でも、それ以上詳しく聞くことはできませんでした。このことが気になり、自分で調べてみると、どのような仕事に取り組んでいるのか概要が分からないのは、コミュニケーション不足が主な原因だと分かりました。私は、外国人にとって、言語の違いがコミュニケーション不足につながっていると感じました。そして、日本在住の外国人が直面する生活の問題についても調べてみました。問題点については主に、日本語や日本の習慣が分からないこと、不安定な雇用や労働環境、日本人の勝手な偏見などがあげられていました。多様な国の外国人との共生社会が進む中、まだまだ外国人にとっては住みづらい状況があるのかもしれない。

これらをふまえて、私は外国人と共生し、より良い地域づくりをいくために大切なことは、日本人も外国人も互いに歩み寄る努力をすることだと考えました。言語の違いや文化の違いはあるが「みんな違う」のが当たり前ならば「お互いに認め合う」のも当たり前だと思います。私が参加した交流会には、互いに歩み寄る努力があったからこそ、「言語の壁」も「文化の壁」もなく、笑顔で温かい空気が流れていました。そして、歩み寄る努力があれば、外国人の労働環境の改善やコミュニケーション不足の解消にも繋がり、一人ひとりが住みやすい社会づくりができます。通じ合う必要があるのは言葉ではなく心です。